

世の中には、信じられない出来事というのが存在する。

本来なら、何てことのない一日になるはずだった。

まだ明るいうちに帰ってくると、マンションの前に引っ越し用のトラックが止まっているのが目についた。

今日は夜に配信をする予定だから、先に課題を終わらせなきゃいけない。

エレベーターを降りて廊下に出ると、作業着を着た人が二人がかりで荷物を運び入れているところだった。

（あ、引っ越してきたの、お隣さんなんだ……どうしよう、ずっと空き部屋だったから音とか気にしなくてよかったのに）

搬入が終わるのを、足を止めて待つ。

青い緩衝シートにくるまれた大きな家具の向こうから、背の高い男のひとがひょいっと顔をのぞかせた。

「あ、どうも、こんにちはー。すいません、お騒がせして」

一瞬で、心拍数が上がった。

推しの声に、よく似てたから。

「こんにちは……。いえ、全然——」

キャップを被っているから、顔はよく見えないけど。なんだか背格好や雰囲気、喋り方も似ている気がした。動揺して、自分が今何を喋っているかわからなくなる。

「ひょっとして、お隣さんですか？」

「あ、そ、そうです……」

荷物が部屋の中に運び込まれると同時に、距離が縮まる。のぞき込むように視線を合わせた彼は、マスクをずらして人なつっこく微笑んだ。

「今日、隣に引っ越してきた間宮と申します。どうぞ、よろしく」

「……………え？」

「？ どうしました？」

「……………いえいえ！ なんでも、ないです……………!!」

正真正銘の、推しだった。

いつも画面越しにあれだけ見ているのだから、見間違えるはずもない。

私は心の中で叫びながら、風に乗ってほんのりと漂ってくる良い匂いを肺の奥深くまで吸い込んだ。

『これ奥の部屋でよかったですかー？』と、中にいる引っ越し業者さんが声

を張り上げる。ちらりとのぞいた部屋の中はうちと似た間取りで、なぜだか興奮した。

「あ、はい！——すみません、後で改めてご挨拶に伺っても？　ご迷惑じゃなければ、なんですけど」

「ええ!?　は、はい……!　迷惑なわけ、ないです!!　いえでもそんな、お気遣いなく……!」

推しに会いたいという下心が真っ先に顔を出しつつ、遠慮とおそれ多さにパニックになった。

「よかった。それじゃあ、またあとで」

うそ。これ、夢?

お気に入りの配信の一コマを切り抜いたホーム画面からとんで動画を開く

と、手のひらの中にはたった今至近距離で浴びたあの神々しい笑顔がある。

先ほど目に焼きつけた光景と照らし合わせて、人違いじゃないことを何度だって確かめずにはいらなかった。

「……………!!? 今も推しが、隣に……………!!?」

そう思うと、息をするのも緊張してくる。内緒話をするようにひそめた声で叫びながら、玄関でしゃがみ込んだ。

※

夢のような現実に一週回って冷静になった私は、その後黙々と課題を終えた。いつもと変わらない作業に没頭していれば、落ちつきを取り戻せると思っただのだ。

ただその間も、推しが隣人だったらあり得るかもしれない数々の妄想が浮

かんでは消える。そうして、キャパオーバーで叫び出すのを繰り返した。口元をおさえつつ、無意味に隣の部屋に続く壁をじっと眺める。

私は、いわゆるガチ恋である。推しのことが異性としても好きで、もし実際に付き合えるなんてことがあったら一生の幸せ。

前の推しと違って、奏人くんはファンとつながったりはしないタイプのはず。彼女はいないと公言しており、ガチ恋としては藁にもすがる思いでその言葉を信じるしかない。つながり目当てと思われたくなくて、DMを送ってみたこともない。

ごく少数の界限のフォロワーさんと相互になっているだけの鍵垢で、推しへのガチ恋感情を叫びつつ、ひっそり推し活しているだけ。

一度だけリアルイベントで一对一でお話する機会があつて、そのときのチエキを宝物として後生大事にしているだけの女だ。

だがしかし。

ここへ来て私は、運命のしわざとしか思えない幸運を手に入れた。

推しが突然隣に越してくるとか、私がひっそり書いて鍵垢に上げて一瞬で消したナマモノ夢小説の内容そのものなんですけど。

イベントでの五分にも満たない接触で私のことを好きになってくれた奏人くんが、思いがけない再会後に告白してくれて付き合うことになるという……願望百パーセントで書いた物語。それが現実になることを、ありえないと打ち消しつつもどうしても期待してしまう私がいる。

家具を動かしたりする物音が聞こえていた隣の部屋は、今はもうすっかり静かになった。引越し業者さんにお礼を言ってみ送る礼儀正しい推しの声も、二時間ほど前に確認した。

半径十数メートルに推しが生息しているなんて嘘みたいにな、いつもどおりの我が家だ。

あとで挨拶に行くと言っていたけれど、もう夜だし、きっと明日以降にということだろう。引越して疲れてるだろうし。

そもそもが、社交辞令かもしれない。めっちゃくちゃ期待してしまっていて悲しいが。

そう結論付けた私は、そろそろと、どこか後ろめたい気持ちで配信の準備を始めた。

私は週に二回ほど、顔を隠してオナニー配信をしている。

なぜそんなことをしているかというと、学費と生活費のためだ。

この部屋は親戚の所有する物件で、両親と死別した私への援助として、大

学卒業まで住まわせてくれている。住む場所があるだけありがたいが、その他の費用は自分で何とかしなければならない。奨学金を借りているけどいずれは返さなくちゃならないし、資格取得のための勉強もしなくてはいけない。もともと性欲が強めだったのもあって、割のいいお小遣い稼ぎとして選んだのがこれだった。

はじめたばかりのときから熱心に応援してくれて、投げ銭をいっぱいしてくれる古参の人もいる。紳士的で優しくて、こんな私に沢山課金をしてくれる。でも、おかしな見返りを求めてきたりはしない。他の人が過激な要求をしてくれれば咎めてくれるし、『maya』というアカウント名のこの人がいなかったら続けて来られなかったと思う。

大学でも上辺の付き合いしかしてない私にとって、インターネット上の顔も知らないつながりの方が、むしろ親しみを覚えることすらある。配信の古

参ファンのひと、鍵垢のフォローさん、そして推し。

かわいい部屋着を着て、配信開始のボタンを押す。

待機してくれてた人のなかにいつものアイコンを見つけて、少しだけほっとした。

「こんばんは。待っていてくれてありがとうございます。今日は……お姉ちゃん
が泊まりに来ていて。バレないように、こっそりやります……♡」

隣に、推しがいるかもしれない。大きな声を出したら聞こえちゃうかも。
そんな緊張と、わずかな興奮。

下着をつけてない胸を自分で揉んで、「ん……♡」と吐息を漏らす。

乳首を両手で探りあてて、焦らすようにこすっては、指先でつまんだ。
服をたくし上げれば、ぴんとたった乳首が恥ずかしくて体が熱くなる。

やがて、クロッチに指を忍び込ませる。

自分でも驚くくらい、濡れていた。

「ん……♡や、あ……♡私のここ、こんなに、濡れちゃってる……♡つ♡ないしよだから、いつもよりも、興奮しちゃって……♡つふ、うう♡や、あ♡くりとりす、くるくるするのきもちいい……♡あっ♡あっ♡こんな、こと♡♡だめなの♡に♡ん♡ん……♡♡」

すごい速さでコメントが流れる。たった今画面の向こうのたくさんの男の人が、オナニーしてる私をオカズにしているんだ。

ふと、隣の部屋にいる奏人くんのことか頭をよぎった。

『私、何やってるんだろう』と一瞬で我に返って——快感も興奮も消しとんでしまった。

「……あっ♡やああ♡んっ♡んう♡つも、だめえっ♡バレ、ちやうっ♡イツ

ちやう、よお……っ♡っあ♡あ——っ♡」

そこからは精一杯演技をして、イクふりをして早めに配信を終わらせた。

「はあ……今日も、付き合ってくれてありがとうございます。一緒に気持ちよくなれてたらうれしい、です。……もしかしたら、配信もうやめるかもしれない……」

罪悪感で、ぼろりとそんなことをこぼす。

推しが隣に越してきて、こんなことをしてる自分が恥ずかしくなってしまう。奏人くんじゃない男のひとたちに向けて、痴態を見せつけてお金を稼いでいるなんて。やっぱり、顔向けできない。本当にいまさらだけど。

にわかに、コメント欄が荒れ始める。

『は？ 彼氏でも出来た？ 本当は姉じゃなくて彼氏が泊まりに来てるんだろ』

『え、やめんの？ ありえない。いくら使ったと思ってんだよ』

『配信やめて俺の彼女になれば問題ないな』

『せっかく今度衣装買っただけで約束手配したのになあ。送るからDMで住所教えて』

『卒業配信はデイルドで処女喪失ってことで』

こわくなって、配信を切った。

男のひとはオカズになればなんでもいいんだろう、たといつやめたって別に何とも思われない。そう考えていたけど、私個人に執着されるおそろしさを実感させられたみたいだった。

ふと、インターフォンの音が鳴り響く。息を殺してドアスコープを除けば、キラキラした推しがすぐそこにいた。

気分が沈んでいた私は、推しに会いたい気持ちを抑えられなくて——つい、扉を開けてしまった。

「あつ、こんばんは。すいません、夜遅くに……ご迷惑でしたかね？」

「あつ、いえ、全然……こんばんは。こんな格好ですみません……」

可愛い部屋着も、さっきまで欲にまみれた視線にさらされていたものだ。後ろめたさに、泣きそうになって俯く。せめて、着替えればよかった。

「いえいえ。……どうかしました？ 大丈夫？」

「いえ……なんでも、ないです……」

気づかわしげな息継ぎの音が落ちる。それは配信で見る推しの大好きな仕草そのもので、こんな時だけ胸があたたかくなった。

「つかぬところをお聞きするんですが、アレルギーとかってあります？」

「あ、いえ、とくには……！　なんでもたべます!!」

奏人くんがくれたものなら。たとえ苦手なものであっても、なんだって食べる……!!

「本当？　よかったらこれ、引越しそば……僕、そば打ちが趣味なんですけど。さすがに手作りは抵抗あると思ったんで、習ってるところのプロが打ったそばです。老舗で、めっちゃくちゃ美味しいんで。ぜひ！」

知ってる。人としては正しい気遣いだけど、出来ることなら奏人くんが打ったおそばが食べたかった……！

「え、あ、本当にもらっちゃっていいんですか!?　本当に、ありがとうございます……！」

受け取った宝物を感動とともに眺めていると、推しが私をじっと見つめている気配がした。

「……あのー。人違いだったら申し訳ないんですけど。ひょっとして……前に会ったことがあります？ 僕のイベント、来てくれましたよね？」

「エッ!? 覚えててくれたんですか!？」

「あ……」

「う、うるさくてすみません……!」

しー、と困ったように笑う奏人くん、心拍数が上がった。

指、きれい。見惚れてしまう。

内緒話をするように、奏人くんが距離を詰めてくる。

「もちろん、覚えてるよ。忘れられるはずない。……出来ればもっと、話したいな。でも、ここだと近所迷惑かも」

「あつ、えっ……!? わ、私ももつと、お話したいです……!」

「じゃあ、近くのカフェでも行く?」

「あつでも、私なんかと一緒にいたらまずいんじゃないや……奏人くん、有名なので」

自意識過剰かもしれないが、ガチ恋勢というのはおそろしいのだ。うかつなことをすれば、SNSや掲示板で袋叩きにあったり、暴露系チャンネルに持ち込まれてしまうかもしれない。

「いやー、君とならどう思われても別にいいんだけど。んー、でもそっか。もし、君さえよければ……」

すう、と息を吸って、彼はにっこりといい笑顔で笑った。

「おうち見せてくれない?」

「エッ!? う、うち!? ですか……!? 今から!?」

「そう。だめ？」

どうしよう。目の前で首を傾げる推し、かわいすぎる。

「だ、だめっていうか……」

「僕のグッズとか、飾ってくれてないかなーって。そういうことはしないタイプ？」

「い、や……！ めちゃくちゃ、してますけど……!!」

念のため、配信をする部屋には一切置いていないけど。もちろん、推しを奉る祭壇ならある。

「してくれてるんだ。いやあ、嬉しいな。実は今度、ファンの子のオタク部屋を訪問するっていう企画を考えてて。実際どんな感じなのかなーって、気になってまして」

「は、はあ………それ、どうやってファンを選ぶんですか？ 血で血を洗う争い起きないですか？」

人選や内容によっては、下手したらとんでもないことになる。少なくとも、同担のタイムラインは嫉妬で荒れまくるにちがいない。

「うーん。まあ実際色々問題があるかもしれないから、その辺りをちょっと確かめたくて」

「大事だと思えます」

なぜか真面目な顔で頷きあって、私は室内を振り返った。

「……ちよつと中、片付けて来ていいですか」

「はい、もちろん。お手数おかけしてすみませんね、よろしく願いします」

昨日、掃除しておいてよかった。見られたくないものはクローゼットに乱雑に仕舞いこんで、扉を閉めておけばいい。

「お邪魔しまーす。……うん、女の子の部屋の匂いだ」

「!? 待ってください、今ルームフレグランスで消臭を……!」

「なんで？ 良い匂いなのに。ずっと嗅いでたいくらい」

「ひええ……うう……!」

何だこれ。本当に夢？　じゃなくて現実？

推しが今、私の部屋にいますけど。

「あとこれ、おそばね。冷蔵庫入れときまーす」

「あ、はーい」

「これ、茹で方にもコツがあつて……もしよかったら今度、僕に作らせてくれませんか？　せっかくなら、美味しくたべてもらいたいんで」

「え!?　あ……お、お願いしても、いいですか!？」

「やったー。じゃあ、特製のつゆも作っちゃおう。バルサミコ酢あります？」

「えーと、ないですね……そんな凝ったものは」

「そっか。じゃあ、僕んちで食べるのもいいかもね」

「……!？」

夢のような発言に頭がショートしつつ、例の推し部屋に案内する。

「うんうん、こんな感じかー。僕への愛が溢れてますね」

「……はい……なんか本人に見られるの、めっちゃくちはずかしいです…

……」

「いやあ、もっと恥ずかしいことあるでしょ。ねえ？——あっこれ、あの日のチェキ！めっちゃくちや大切そうに飾ってあるー！ほんと、嬉しいな」

「はい……心の、支えにしています……」

奏人くんが振り返って、ベッドルーム兼配信部屋の扉を何気なく開いた。

「あ、そっちは……！」

「ねえ。さっきまで、ここで配信してたの？」

一瞬にして、雰囲気が変わる。

「……………え？」

「オナニー配信してたでしょ。やめるんだって？ 賛成だけど、卒業配信とかやらなくていいからね。普通に垢消ししちゃえ」

「え……？ えっ？ な、に……なんで、知って……？」

彼は私を引き入れて扉を閉めると、手を取って指先を絡めた。

「知ってるよ？ 君のことならなーんでもね」

昏い瞳を妖しく輝かせて笑った奏人くんは、動揺する私の耳元に囁く。

「でも、君は僕のこと、知ってるようで知らないんだよね。だから、教えてあげる。知りたいでしょ？」

包み込むように肩を抱かれながら、ベッドに座らされる。状況を飲み込めずにいる私は、流されるまま茫然としていた。

「バレてないと思ってた？ 誤爆されたJRL踏んでさあ、びっくりしたよ。速攻消したから大丈夫だと思ってたでしょ」

「え、え……？」

心臓が、ばくばくと激しく鼓動している。

「ほら。君が仲良くしてくれてる『カナP』って、僕のことなんだよねえ。ある意味、オフ会だね。ずーっと、会いたかったよ」

本人にしか表示できない画面を見せながら、奏人くんがじっとりと笑う。

たしかに、初めての配信のとき、宣伝ポストを誤爆してしまった。一瞬で血の気が引いて、あわてて消したのだった。

避難用のほとんど使っていないアカウントで、フォロワーに彼女——否、彼——しかないなかったから油断してた。

実際は、ばっちり見られてたんだ。

「はじめはさ、戸惑ったよね。僕の大好きな子が、オナニー配信とか。まあ正直興奮はしたけど、他の奴らに見られるのは本当に嫌でさ。毎回、気が気じゃなかったよ」

「え、え……っ？」

「こんなえっちな配信しちゃうくらい、お金に困ってるのかなあって。それならなんとかしなくちゃって思っ、即上限投げたけど」

「っ、あ……♡」

膝の上に抱き直されて、お尻に硬いものが当たる。

（こ、これ……私なんかで、興奮してくれてるってこと……？ あ、の、奏人くんが？）

「君の配信オカズにして、何回抜いたと思う？ ああ、『maya』っていうのも僕なんだけどさ」

「……うそ……」

「嘘じゃない。立派な、最古参ガチ恋勢です。推し活タイムラインでも、オナニー配信でもね」

ガチ恋の推しに、ガチ恋されていた……？

ちよっともう、よくわからない。

「あー、あとね。こうして、隣に越してくるっていうのは……君が鍵垢に上げて、すぐに消しちゃった僕の夢小説を参考に見てみた。どうだった？」

思ってもよらない暴露に、身体がかつと熱くなる。言葉が、出ない。

「どうして消しちゃったの？ 君のタイムラインに張り付いてたおかげで、保存出来たからよかったけど。君の中の僕ってこう見えてるんだー、って。今も、僕の宝物」

配信の誤爆だけじゃなくて、あれも見られちゃってたんだ……。恥ずかしくて、死にたい。本人にしっかり読まれた上、再現までされちゃうとか。そんなことになるなんて、誰が予想した？

「そんな感動のご対面、なんだけど……ちよつとね、お叱りをしなきゃいけない。——君ってば、ネットリテラシーが甘すぎるよ。配信の方では割とちやんとしてて安心したけど、鍵垢の方はてんでだめ。擬態した俺のこととか、信頼出来るフォローだと思ってくれたのかもしれないけど……おかげで住所も大学も、もろもろ全部特定出来ちゃったし。俺のネットスト力が半端ないのを抜きにしても、悪意があるオタクもいっぱいいるしさ？ 無害オタクな君でも、ちよつとしたことで燃やされるんだから。でも、大丈夫。俺たち二人のことは炎上なんかさせずに、完璧に守るから」

こんな非常事態なのに、いつも配信では『僕』ってかきこまってる推しからたまに出る素の『俺』を生で聴いて、ハチャメチャに興奮している私がい
た。

そのくらいの現実逃避でもしないと、ありえない状況を受け止められない。

「俺、君のために、有名配信者になろうと頑張ったんだよ？」

「……………？　それ、どういう……………」

「言ったとおりの意味だよ。君に推されたくて、君のいちばんになりたくて……………配信者になったんだ」

「……………そんな……………」

予想外の真実に、ただただ言葉を失う。

「俺たちの出会いって、あの例の……………炎上したゲーム配信者だったじゃん？　君と出会わせてくれた恩人だけど、手あたり次第ファン食いまくってるような奴だからね。決め手になった件も、俺が裏から手を回して発覚するように仕向けたんだけど。だってあいつ、俺の大好きな君のこと、サブ垢で狙っててさあ。本当、危なかったよ？」

彼は、歌うように私の前の推しのことを話しはじめる。確かに、フオロワ
ーの『カナP』さんとながったのは、私がその人を推していたときのこと
だ。

「で、元推しを失った君の前に、配信者としての俺が現れた」

……そうだ。タイムラインで奏人くんをおすすめしていたのは、『カナ
P』さんだった。それがきっかけで、奏人くんを推しはじめたのだった。
それすらも、そう仕向けられていたということ？

今私の目の前で、知ってるのに知らない笑顔で笑う、奏人くんに。

「ちゃんと僕に推し変えてくれて、本当に嬉しかった。ね、俺は君以外見
てないし、安心でしょ。君が僕に抱いてくれてるガチ恋感情だって、よろこ
んで全部受け止めます。鍵垢で呟いてくれてた俺への愛の言葉、応援……い
つも、ありがとう。何よりも、励みになってた」

至近距離で浴びる奏人くんの、心底幸せそうな笑顔。どろどろに溶けた甘い声。どれも、配信では見たことがない。それが、私だけに惜しげもなく向けられている。

「ね、僕がいればいいでしょ？ 君のこと、これまでもこの先も、一生愛してるから」

そう、囁かれた言葉に――報われたみたいに、感じてしまった。たとえばそれが歪で、ありえない恋のキセキでも。

「……もし、ガチ恋だと言ってても、リアルで迫られたらムリっていうんだっただら。俺のこと、警察に突き出していいから。君に愛されないなら、配信者の俺に意味なんてない。全部、君のための活動だったから。君の手で破壊させて？ 俺のガチ恋人生の幕を引いて」

「……っ……そんなこと、出来るわけ……。しません、ぜったい、しないから……」

「本当？ 俺のこと、こわくない？ 僕はねえ、今の自分を客観視したとき、ふつーに怖いと思ってる。でもそれをさせてしまうのが恋愛であり、ガチ恋だよ。そこで踏み止まるのも愛であり……。でも、止まれなかったや」

どうしよう。奏人くんの言ってること、全部わかる。

「ねえ。君に恋して、どうしようもなく愛しちゃって……。こんな、正気で狂ってる俺のこと、受け入れてくれる？」

うなずくのもおそれ多くて、かわりに奏人くんの手をぎゅっと握った。吐息が揺れて、独り占めするみたいにぎゅうって抱きしめられる。

「……嬉しい。絶対に、俺が幸せにするからね」

恍惚めいた甘い吐息が耳元にかかって、ぞくぞくした。

おもむろに、大きな手のひらで優しく胸を包みこまれる。

「っ、ふ……っ♡」

「ね、下着付けないまま出ちゃったの？ 相手が俺じゃなかったら絶対にだめだよ。こういうことされちゃったらどうするの？」

「っあ……♡まっ、て♡や……っ、あ♡」

すりすり、と親指の腹で布越しにこすられて、快感をひろってしまふ。配信で不完全燃焼だったふんと——大好きなひとに触れられているという事実、おなかがきゅうきゅう痺れてとまらない。

「もうこんなに目立っちゃってる。乳首よわいんだもんね。可愛い♡いっぱい、いじってあげたいんだけど……だめ？」

「あ……♡あ、あ♡ん……っ、や♡や、あ……♡」

（きもちいい、きもちいい♡奏人くん、ちくびいじられちゃってる……っ♡こんな、の♡だめ、なのに……♡っ……あ……♡……ほんとに、だめ、なの？）

くるくる、すりすりともどかしい刺激が、だんだんと思考力を奪っていく。
「こうやって焦らすの好きでしょ。いつもやってたもんね」

「んん……♡は、あ……っ♡ん、う♡やあ……♡」

そつと耳を食まれて、びりびりと甘い痺れがひろがった。唇でふちをなぞられるたびに、ぞくぞくと背筋が粟立つ。耳たぶを愛でるようにはむはむされて、じんわりと幸福感が広がった。

（もっと、いっぱい……♡いじられ、ちゃったら♡どう、なっちゃうんだろ
う……♡）

「ねえ、どう？　もっと、されたい？　だめだったら言って？　好きな子のいやがることは、したくないからさ」

「ん……………あ……………♡ひ、う♡」

様子をうかがうように、優しく乳首の周りをなぞられる。自分で触るのとは、ぜんぜんちがう。ずっとずっと、きもちがいい。好きなひとにされてるって思うと、こんなに感じちゃうんだ。

（され、たい♡もっと、いっぱい、されたいよう♡奏人くん、きもちよくさせられちゃいたい……………♡）

「……………や、じゃ、ない……………♡です……………っ……………♡」

「ほんとに？」

耳元で熱っぽい吐息がかすめると同時に、乳首をやさしくきゅっつつままれた。

「ん、んっ♡あ……っ♡っし、シて♡くださいっ♡いっぱい……♡んん♡」
「本当？　じゃあ、いっぱいきもちよくしてあげるね。オナニーよりもずう
っと……俺にされる方がいいって、教え込んであげる」

手のひらですくうようにおっぱいを揉まれて、すっかり硬くなった乳首を
つつんって指先で刺激される。もっともっとされたくって、ついお尻を押
しつけてしまった。

「期待してるの？　しょうがないなあ」

応じるように、奏人くんの硬くなったモノの真上に座らされて、おまんこ
がきゅうんってなった。服の上からでもごりっとする。

「っ、あ……♡」

（こんなの……布がなかったら、はいっっちゃう♡奏人くんのおちんちん、す
っごく、かたい……♡おとこのひとつで、こんなになるの？）

「こーら。顔背けちゃダメでしょ？ 隠すのもダメ」

「や、あ……っ♡」

「ねえ、いっつもどんなこと考えてオナニーしてたの？ 俺のこと、オカズにしてくれてたりしない？」

「ん、あっ……♡奏人くんの、こと♡オカズにしたこと、あります……♡配信するときも、いつも……奏人くんに、えっちなことされちゃったら、とか♡奏人くんに、配信みられてたら、とか……かんがえて。こうふんして、ました……♡ごめんなさい♡」

「……っ……それ、すごい情報だな。まあ、本当に見てただけだね。謝らなくていいよ？ 俺のこと考えてオナニーしてくれてたとか、最高以外の何ものでもない。いーこ、いーこ♡」

「あ♡ああ……っ♡だ、め♡だめえ♡やああ♡」

乳首の周りから先端までを、指先でやさしくよしよしされる。思わず、腰

をそらして喘いだ。

もうぐしよぐしよに濡れているであろうおまんこを奏人くんのモノに押しつけて、ひとり感じてしまっている。

「ん♡んん…っ♡ん、う♡すりすり、やあ…♡きもちいい、からあ♡だめなの♡」

「よし、よし♡いつも、がんばってるもんねえ。えらい子には、ごぼうびをあげなくっちゃ。僕がその光栄すぎるお役目を果たせるだなんて、うれしすぎちゃうよね。はりきって、君のこと甘やかしてあげないと。僕にめいっぱい愛されて、だめになっちゃうように…♡♡」

死ぬほど視聴した奏人くんの甘やかしASMR配信よりも、どろどろに甘く優しい声でささやかれる。頭も身体もとろけてしまいそうに、ふわふわしてくる。肯定されて、甘やかされて、愛されて。ほんとうに、だめになってしまいそう。

独り占め、しちやってるんだ。奏人くんが囁いてくれるこの言葉は、私だけに向けられたものなんだ。マイクを通した作り物じゃなくて、本物の本心なんだ、って。信じられる。そらおそろしいくらいのを、わからされてしまう。

「必死に腰押しつけちゃって、可愛いなあ♡俺のこと、求めてくれてるの？
はあ、君のここ、本当にやわらかいね♡それに、あったかい……早く、ひとつになりたいなあ」

「あ♡や、あっ……♡ん♡ん♡やあ♡♡だ、め♡それだめ♡あ♡♡あ♡♡
そつと腰を抱かれて、性行為を思わせる動きでとん、とん、と下から揺さぶられる。それだけで期待して、ムラムラしてしまう。

完全に硬くなった乳首を指でやさしくぎゅう、って押し込められてから、かりかりひっかかれる。きもちいい。

「早く、こっちもさわりたいけど……まずはおっぱいで、おかしくなるくらいきもちよくなるっか♡」

「んっ♡ん♡ん♡はあ、い……っ♡なり、ましゅ♡あっ♡あ♡あ♡」

（どうしよう♡こうやって後ろからがっちりホールドされながら、たくさん乳首責めされちゃうんだ……♡）

「可愛いお返事だなあ♡——ねえ、配信用に、鏡置いてるんだね。君が俺にきもちいいところ弄られて、どんどんえっちになっていくところ……一緒に見ながらやってこうね♡」

「や、やあ……♡はずかし、い♡や、だあ♡」

「だいじょうぶだよ。恥ずかしがってる君、世界で一番可愛くてエロくていいから。どんな君のことも愛してるよ」

「っ……♡ほんと、に……？」

そんな風に、全肯定されたら。自分でも自信がない私のことを、全部ゆだねてしまいたくなる。

「当たり前でしょ？ 俺、君にだけは、絶対に嘘つかないよ。あ……フォロワーに紛れてたのはセーフ？ 今回いきなり告白してびっくりさせちゃったことも、サプライズってことで許してくれる？」

「ん、ん……っ♡っゆるし、ます♡うれしかった、ので……うれしすぎて、まだ、しんじられない………」

「じゃあ、信じられるまで何度でも教え込んであげる。俺が君のことが大好きで、愛しちゃってるんだってこと」

甘えるように頭をすり寄せられて、私も身を寄せた。首筋に顔が埋まって、ぺろりと舌を這わされる。食べられちゃうみたいでぞくぞくした。

「つと。お話中でも、手は止めない方がいいよね。だって、ちよつと放置されただけでも……君の乳首、じれったそうに勃ちあがってる。ほら」

「あぁっ♡やぁ……っん♡ん♡っふ、う♡」

きゅって摘ままれて、思いきり悦びの声をあげる。ほんとうにその通りだったから、言い当てられて恥ずかしい。奏人くんの手によつて気持ちよくさせられることへのあさましい期待を、優しく肯定されて、満たされたくてふるえている。

「俺に、さわってほしいんだねえ。本当に、可愛い♡ちゃんと、期待に応えないと」

「あ……♡あっ、ん♡ん♡やぁ……っ♡あっ、ん♡ん♡う♡は、あ♡あ……♡も、う……っ♡」

かりかり、すりすり、ぴんぴんって。布越しにされると、どんどん敏感になっていく。こらえ性のない私は与えられる快感を貪欲に拾って、もどかし

さすら感じてくる。

「直接、さわってほしい？」

私の気持ちを見抜くように言われて、期待に息を飲んだ。

「っ、ん……♡は、い……♡」

「じゃあ、自分でまくりあげてみよっか。俺に、さわってほしいんだもんね？」

「っ……あ……♡」

もたつく手を、優しく誘導される。エッチなふるまいをしている気がして、恥ずかしさにおなかがきゆうんとなった。

「っ……♡ふ、……ん、ん……っ♡」

汗ばんだ肌が空気にさらされても、羞恥で身体が熱い。奏人くんにさわられたくて仕方のない私のおっぱいが、奏人くんの視線に差し出されて、ぷるんとふるえた。

奏人くんが、堪えたような溜息を漏らす。

「ん……よくできました。すごくきれいで、えっちな色してるよねえ……生で見ると格別」

「っ……♡あ♡あっ♡や、あ……♡ん、う♡ん♡♡」

愛でるように、もみもみとやさしく揉まれる。硬くなった中心が、奏人くんの手のひらにこすれる。それだけできもちよくて、目を閉じて堪能した。充血しきって、これ以上なく発情した先端を、指先でやさしくつままれる。焦らすように輪郭をくにくにされてから、中心をくりくりされる。待ち望んだ刺激に、つい大きな声が出てしまう。それを繰り返されると、どんどん感度が増えていくようだった。

「ん、あ♡ああ♡やあ♡ん、う♡あ……っ♡そ、れ♡らめっ♡らめえ♡」

喘ぎながら、自然と大きく脚をひらいてしまう。乳首をいじられる快感がおまんこにまで伝わって、じんじんする。もう、下着がすっかり張り付いてしまっているのがわかる。

「あー……いじるたびにかたくなるね。けなげでカワイイなあ♡そんなに、俺にされたかったんだ。えっちでやらしい君が満足できるように、もっといっぱいシてあげないとね」

「っは、あ……っ♡ごめん、なさい♡えっち、で♡やらしい子、で♡ごめん、なさい……っ♡奏人くん、されるの♡きもちよく、てっ♡」

「ううん、あやまらないでいーよ。俺にされてる君が、配信よりずーっとなっちで嬉しい。これって俺のせいでしょ？」

「ん♡うん……っ♡奏人くんの、せい、だよお……♡あっ♡あっ♡やあん

♡」

奏人くんのせいでえっちになっちゃった私の乳首を、思う存分いじられて快感に蕩けていく。

「うん。ぜんぶ、俺のせいにして？」

「ひっ、あ♡やだ……♡ふ、う……っ♡あ……♡それ、だめ♡らめ……♡」
つまむようにして、根元をマッサージするみたいに指でしこしこされつづけると、甘い快感がずうっとまとわりついて離れなくなる。

こんなの、自分じゃしたことない。

「っや♡や、だ♡ずっと、きもちいい♡こんな、の……♡っおかしく、なる♡やああ、ん♡んんっ……♡ふう……っ♡あ……っ♡あ……♡いい、あ♡」
「ほんとにいや？ きもちいいんですよ。そんな甘えるような声出しちゃってさ、めっちゃくちや腰にクるなあ」

じんじんとうづく甘い期待を満たすように、延々と刺激を与えられて。幸福感に似た、うっとりとした気分がひろがっていく。

自分じゃ、こんなはずといじったりすることないから。知らないところまで、連れて行かれそうで。ちよつとの怖さと、奏人くんがいてくれるんだから大丈夫なんだ、っていう安心感で——期待と快感だけが、高まっていく。

「あ……っだ、め♡だめ……っ♡奏人くんの、手で……♡堕とされ、ちやう……♡おかしく、なって……っ♡っああ♡」

「俺の手で堕ちてくれるの？　ずーっと望んでたことが叶っちゃうんだ、そんなの嬉しすぎるよねえ？」

「ああ♡わたし、も♡うれ、しい……♡っれ、す♡あ——……っ♡ああ♡」

先端をかりかりと爪でくすぐって、親指でくいくいと埋めるのを繰り返さ

れるのも、たまらなくきもちがいい。まだ乳首だけなんて信じられないくらい、きもちいい。

「あっ♡くにくに、らめっ♡ふ、う……っあ♡あっ♡それ、だめ♡れすう……っ♡」

「きもちいい？ もーふにやふにやになっちゃって、可愛いね♡」

「あっ♡あ♡んん……っ♡う、あ……♡」

いつのまにか、無意識に腰をへこへこしてしまっていた。媚びるように、奏人くんのおちんちんにおまんこをこすりつける。

「わー、何それ。えっちな動き……やらしー……これって今、俺のちんこでオナニーしてるの？ 嬉しすぎるんですけど」

「あ♡ごめん、なさいっ♡きもちよく、てえ……♡がまん、できなくて♡ん……っ♡あっ、やあ……♡」

言い当てられて、子宮が甘く重たくしびれる。はずかしくて、腕で顔を覆った。

「おっと、隠しちゃだめでしょ？　きもちよくなってる顔、ちゃんと見たい。俺だけに、見せて？」

優しく腕を取られて、しっかり恋人つなぎにされる。ぎゅって握り返したら、顎に指をかけられて、顔の角度を変えられた。

「や、あ……♡みないで、くださ……っ♡あぁっ♡ふ、う……っん、ん♡」

「あー……ほんつとうに、かわいいね。もっと、みたいな」

そのまま指で唇をなぞられるだけで、甘いしびれが走った。ふるえる吐息を吐き出す。

だらしなくひらきっぱなしの唇からこぼれかけたよだれをすくうようにし

て、くちゆくちゆと入り口であそぶ大好きな奏人くんの指を、私の方からちらちらと舐めた。

その瞬間、余裕がなくなったかのように、奏人くんが真剣な表情をする。

「ねえ。キス、していい？」

「っ、あ……っ♡ん、ん……っ♡」

こくこく、と必死に頷く私に目を細めた奏人くんの顔が近づいて、触れるだけのキスが落ちる。両想いの実感がぶわあっと全身にひろがって、イってしまうかと思った。

この世にこんなに柔らかくて、ふわふわ夢見心地で、切ないくらいに幸せな気持ちにさせてくれるものがあるんだって、今日まで生きてきて初めて知った。

思わずはむ、としてしまつたら、頬をとらえられてがつつりキスされる。濡れたくちびるの感触、侵入してくる舌。熱くて、生き物みたいなそれに口内をなぞられるだけで、ぞくぞくする快感が私の背筋を粟立たせる。舌同士を絡め合う未知の感触を、夢中になって堪能した。

奏人くんの、味だ。不思議と甘く感じる唾液を求めて、奏人くんの方へおずおずと舌をのぼす。煽られたみたいに激しくなるキスに、ついていくのが精一杯で。奏人くんが私に抱いていた感情のすべてをぶつけられるかのような余裕のないキスは、受け止めるだけで絶頂めいた充実感で、全身を貫いていく。

脳が、蕩けてしまいそうなキスだった。

「っ、ふ……♡ん……あ、……っふう♡ん……♡っ、あ……♡」

はあ、と熱い吐息を間近に感じて、奏人くんの紅くなった頬に思わずキスをする。

好き、好き。大好き。

「好き、だい好き……っ……♡奏人くん……っ♡」

「ね、『彼方』ってよんで？『遙か彼方』の、彼方ね。俺の本名」

「……っいい、の？……彼方、くん？」

「うん。いいに決まってる。嬉しい、名前呼ばれるだけでイっちゃいそう」

「ん、むっ♡あ……♡」

キスをされて、二人の間をとろおっと唾液の糸がつたう。それをぬぐった指を、『彼方』くんが舐めた。

「もっかいよんで？」

「彼方くん……っ」

もう一度、キスされる。まるで、私が呼んだ名前を自分のものにしてしま
うおまじないみたいに。

「俺も、大好き……っ……ねえ、配信者としてじゃない俺のことも好き？
君ガチ恋勢の俺も……愛してくれる？」

「うん……っ♡すき、です♡あいして、ます……っ」

「そっか……嬉しいよ。じゃあもう、ずうっといっしょだね♡」

ずっと、いっしょ。その言葉だけで、抱えていた孤独もすべて、奏人くん
——彼方くん塗りに塗り替えられてしまう。

閉じかけていた脚を、ゆっくりと開かれる。ささいな抵抗も優しく制され
て、ふるえる太腿が隠そうとした中心を暴かれてしまう。言い逃れできない
くらいにくつきりと張りついて、色が変わってしまっていた。

「すごい、濡れてる。下着の意味ないかもね」

「や、だ♡ いわないで……っ♡」

充血してふくらんだ割れ目を、つつと指でなぞられてふるえた。布越しなのに、彼方くんの指をじつとりと湿らせてしまっているのがわかる。

その指が焦らすように行き来するたびに、ひくひく、きゅうきゅうと生き物みたいにくぐめくそこ。鏡越しの光景と私自身の反応が、言い逃れようもなく発情をあらわにしていた。

「ん あっ……♡ や、あ♡ だめ……♡」

クロッチをくぐって、そうっ和中に入れられた指が、みだらな割れ目をなぞっていく。やがてくちゅり、と卑猥な音がした。満たされた期待に、恍惚めいた吐息を吐き出す。

「これ、俺にされたからだよね？ それとも、さっきの配信の名残り？」

「っあ……♡ か、彼方くんに、されたから……♡ ですよ♡ っ、んん♡」

「へーえ？ 最高に、嬉しい。こんなにぬるぬるになっちゃってるの、俺のせいなんだねえ。じゃあ、きちんと責任を取りましょう」

「や、あ♡あつ、あ♡くちゅくちゅするの、らめえ……♡あ♡あつ♡」

のけぞって快感に堪えようとするも、はしたなく彼方くんの指に自分から押しつけている私がいた。つい、腰が揺れる。

（好きなひとのゆびで、おまんこ、くちゅくちゅされちゃってる……♡♡きもち、いい♡自分の指と、ぜんぜんちがう……♡♡）

「あーあ……想像以上に、ぐちゃぐちゃだねえ♡下着だめになっちゃうかも、いい？ あとで、記念にくれる？」

「え？ あ……♡♡」

くい、と下着をずらされる。てかてか濡れて、ピンク色に熟れたそこをあらわにされてしまう。言い訳のしようもなく、彼方くんが欲しくて発情してしまっているそこを。

「あ……♡や、だめ……っん……♡」

「ほら、みて。ぱくぱく、ひくひくしちゃってる。えっちだね♡ここなんか……こんなに目立っちゃってる」

「っあ♡あ、うう♡やあ♡っあ、そこはあ♡ら、めえ♡ひああっ♡」

腫れあがった球体をつん、とつつかれて、火がついたかのような快感が一瞬で脳に伝わった。

蜜をからめた指先でくちくち優しく扱かれると、ありえないくらいいきもちがいい。喉が渴くみたいに、強烈な欲で焼かれそうになる。

（あ♡あ♡くりとりす、もっと、いっぱいいいじらりたい♡彼方くんの、手で♡ちくびみたいに、じっくり責められちゃったら♡）

「君、クリ好きだもんね。君の好きなさわり方も知ってるし……でも、俺の方がもっと気持ちよくできると思う。試してみたい？ 配信してるよりも気持ちよくさせたくて、色々と勉強したんだ」

「え、え……？ う、うん……♡彼方くん、に♡いっぱい、されたい……」
「ん、ありがと。嫌だったらちゃんと止めてね、約束」

「はい……♡」

真面目で勉強熱心なところがこんなことにも発揮されてると思うと、恥ずかしいやら嬉しいやらでいっぱいになる。

紳士的で、優しくて。私のこと、ちゃんと見て、考えてくれる。不安すらも受け止められて、ぜんぶ溶かされちゃうみたい。

「ふ、あっ♡えっ、あ……っ♡ふ、うっ♡こりこり、らめ♡っなんか、ああ♡」

「こういうのは、下ごしらえが大事なんで」

恥丘の下、クリトリスの上を、指でこりこりと刺激される。血流が増したのかむずむずしてきて、クリトリスがますますおっきくなった気がした。

かと思えば、クリトリスの下辺りを、三本くらいの指の腹でにゆるにゆると横にこすられる。そうやって手のひらをぐちゃぐちゃに濡らしながら、おまんこ全体をマッサージされる。

じんわりとした快感がひろがって、なんだかぽかぽかしてくるみたいだった。

「ん……っ♡う、んっ♡ふぁ……♡な、に？ あ……っ♡あ♡」

「クリトリスって、女の子のおちんちんって言うでしょう。この辺りはたぶん、裏筋に相当するんじゃないかって……なんにせよ、こうやって血流をよくしておくことは快感につながるはず」

いつも配信で見るような喋り方をしながら、やってることが私のおまんこをいじることだから、脳が混乱でおかしくなりそう。

「こうやって指で、やさしくはさみこんで……側面も、丹念に。きもちいい？」

「っひ♡やあっ♡ぐりぐりらめ♡つらめなの♡それえ♡あっ……♡あ、え……っ？ んん……♡」

手のひらで包み込まれて、全体を優しく何度か押される。

体の中にある性感帯が呼び起こされるみたいに、性器全体が快感に染まる準備をはじめてるみたいだった。

下腹部が、うずうずする。私自身も知らなかった食欲さを、引き出されるみたいに。

「でー、このクリトリスを保護してる皮ね。はずかしそうにお帽子かぶっちゃってて、かわいいね♡これをこうやって……むいてあげる。いつもはしないんでしょ？ 配信ではしてなかった。ね、ぜったいきもちいいから。信じて？」

「っあ♡し、ない……っ♡あっ♡まつ、て……っ♡こわくて、したことな……っ♡」

器用な指で、あつという間に調理されてしまうかのように。

直に空気に晒されるだけで、触られたみたいにひくついてしまった。

「うん、こわがらないでも大丈夫だから。優しく、きもちよくしてあげるからね」

「——っあ♡あぁっ♡りや、め♡そ、れっ♡っ、ひ♡あ、あっ♡んう♡♡あ♡あゝゝ♡♡」

むき出しの球体を、楽器を奏でるみたいにやさしく、だけど容赦なく捏ねられる。比べようがないくらい強い快感が、脳をびりびりと焼く。

これまで私がしてたのはおままごとだったのかと思うくらいの、衝撃だった。

「どう？　ちょっと、激しすぎる？　でも、よさそうだね。こんなに激しく乱れる君、見たことないや♡可愛いねえ……♡」

ぬるぬると蜜をぬり込まれながら、にゆるにゆると扱かれる。かと思えば、指と指を合わせた隙間で、つまむようにくすぐられる。

充血して敏感なところを執拗に可愛がられて、おかしくなりそう。

「ふっ♡う♡うあ♡やあっ、あん♡あ——っ♡だ、めえ……っ♡ああ♡や、あっ♡お、かひく♡なりゅ……っ♡イっちや、うう♡っだ、め♡だめえっ♡ひ——っああ♡」

「いいよ♡俺にクリいじられて、いくとこ見せて？ 君のクリイキ姿、可愛くって大好きなんだよね♡今日はちょっと、いつもより激しめになるかも？」

「っふ、う♡ん、ん♡っ、あゝ……♡あっあっ♡やあ……っ♡あっ♡んああ♡♡あ♡♡♡♡ひっ♡う、あ♡あ——♡」

視界にばちばちと星が散って、やがて白く染まっていく。

はじけるような強烈な快楽に浸されたクリトリスを、指全体でやさしく圧しつぶすように包みこまれる。

絶頂の余韻にひくひくと甘く激しく痙攣しながら、奏人くんの指に甘えた。
「ひ、あっ♡んん、ん……っ♡や、あ♡……っ♡っ、あ♡ふう……っ♡ん♡んっ♡」

声もなく、ただ太腿をびくびくふるわせる。首筋にちゅつと吸いつかれて、その小さな痛みも快感として処理される。

快感で炙られて、息も絶え絶えになった私を——きらきらと輝く恍惚とした瞳で、慈愛たつぷりに覗き込む彼方くん。

「イっちゃったねえ……♡えらい、えらい♡どうだった？ きもちよかった？」

「ん……♡っは、……♡あ……♡ひ、もち……っ♡いっ♡あっ♡あ……♡♡」

こくこく、と必死にうなづく私の眼前に、いとしさが溢れたみたいな満面の笑顔が炸裂する。飼い主になつく仔犬みたいに、顔じゅうや指先をキスで埋め尽くされた。

「あ……っ♡ま、って♡や、あ……っ♡あ、あ♡だ、めえ♡だめ……っひ、う♡うあ♡あぁっ……♡」

イってこの上なく敏感になった神経を、よしよしと優しくなでまわされて、こらえきれず何度も甘イキしてしまう。こんなの、しらない。

すごい。じんじんして、脳が快感の洪水で埋め尽くされて、ずっとときもちよくて——もどって、こられない。

「きれいにしてあげるね。横になろっか」

「……………♡」

そうっと横たえられて、イって力の入らない腕で抱きつく。

いとおしそうな笑みを浮かべながら、大きな手のひらで頭を包みこまれた。
安心、する。